

法華寺旧境内の調査

— 第575次

1 はじめに

本調査は、個人住宅建設にともなうものである。調査地は、法華寺旧境内の中心からやや南東にあたり、法華寺東面回廊の外側の位置に想定されている。西に3m隣接して、旧横笛堂の跡地が発掘調査されており、近世の石組遺構が検出されている。調査は2016年8月1日から8月25日まで実施し、東西6m、南北7mの範囲のなかにL字状の約30㎡の調査区を設定した(図296・297)。

2 基本層序

現地表から、暗灰黄色砂質土(約20cm)、黄褐色砂質土(約40cm)、黄褐色粘質土(約30cm)、黄灰色粘質土(約30cm)、砂礫混黄褐色粘質土(地山)と続く。遺構は現地表から約0.6mの黄褐色粘質土上面で検出した。遺構面の標高は63.1~63.2mで、北から南へわずかに傾斜している。

3 検出遺構

土坑SK11121 深さ約0.3mの土坑。調査区内で約3m分を検出しているが、大部分は北の調査区外に続く。瓦質土器や土釜が多く出土し、そのほかに古代の土器や瓦・磚も含まれていた。土坑の下半部からは安山岩、チャートの人頭大の円礫が多く出土した。出土した土器から14~16世紀に廃絶したものとみられる。

建物SB11122 柱間2.4mの礎石建物。西北隅の柱は礎石が遺存していた。他に南と東に抜取穴と推定される痕跡を1カ所ずつ検出した。建物の向きや規模は不明である。

埋甕遺構SJ11123 南北約0.75m、東西約0.6mの土坑に瓦質土器の甕が据えられている。甕は底面から約12cm分が遺存していた。甕の年代から近世の所産とみられる。

埋甕遺構SJ11124 南北約0.65m、東西約0.5mの土坑に瓦質土器の甕が据えられている。甕は底面から約22cm分遺存していた。甕の内部の底面上に直径約10cmの土師器小皿が2点出土した。これらの年代から近世の所産とみられる。



図295 第575次調査区位置図 1:3000



図296 第575次調査区全景(北西から)

井戸SE11125 南北約0.8m、東西約0.95mの楕円形の磚組井戸。検出面からの深さは約2.9mにおよぶ。掘方は南北約1.5m、東西約1.6m。磚は幅24cm、高さ27cm、厚さ3cmで、外側には綾杉状の刻み目が横方向に2列に施されている(図303)。一周11枚の磚が少なくとも8段積まれており、検出面から数えて8段目の途中から、磚の内側に南北約0.7m、東西約0.85mの桶が検出された。

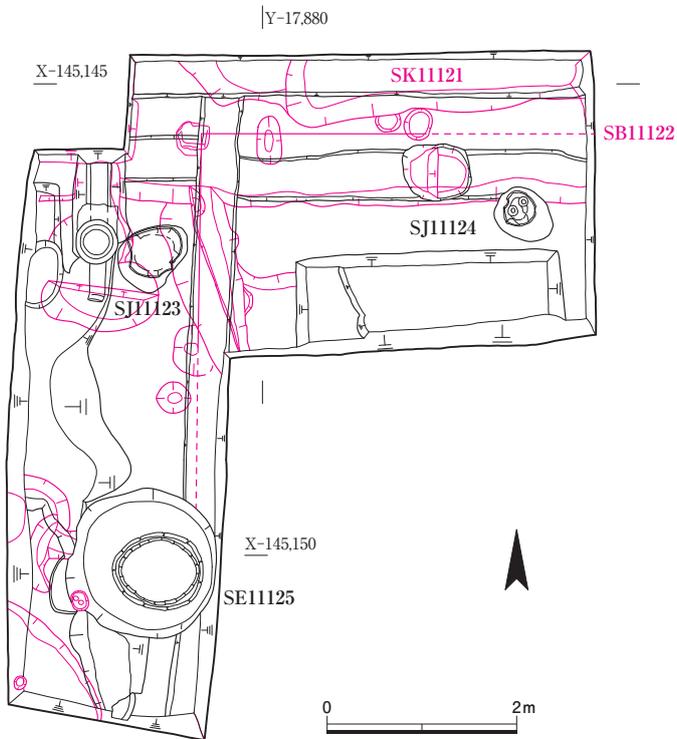


図297 第575次調査遺構図 1 : 80

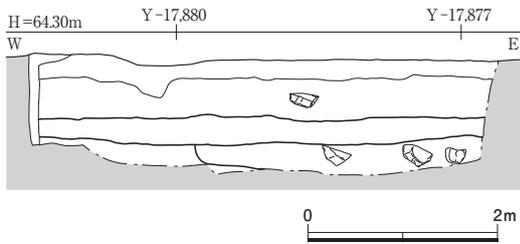


図298 第575次調査北壁土層図 1 : 80



図299 埋甕遺構SJ11124検出状況(東から)



図300 井戸SE11125検出状況(北西から)

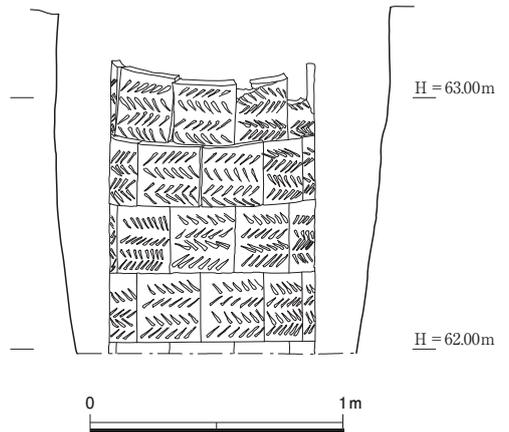


図301 井戸SE11125立面図(西から) 1 : 30

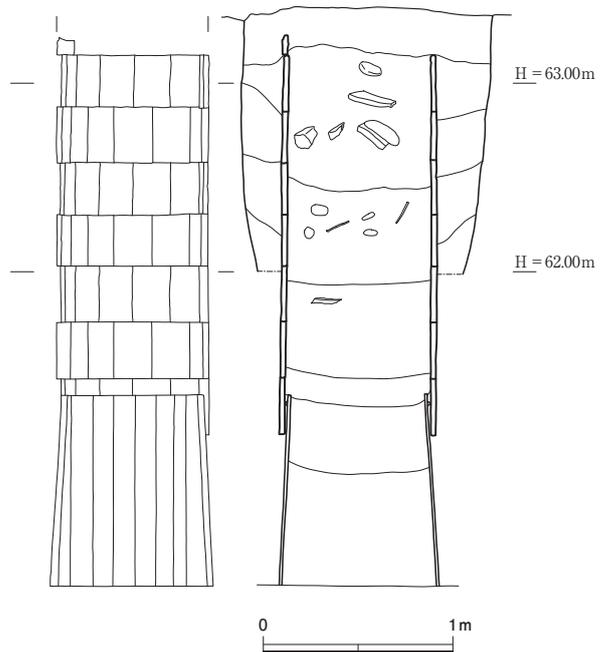


図302 井戸SE11125内面立面図(左)と断面図(右) 1 : 40

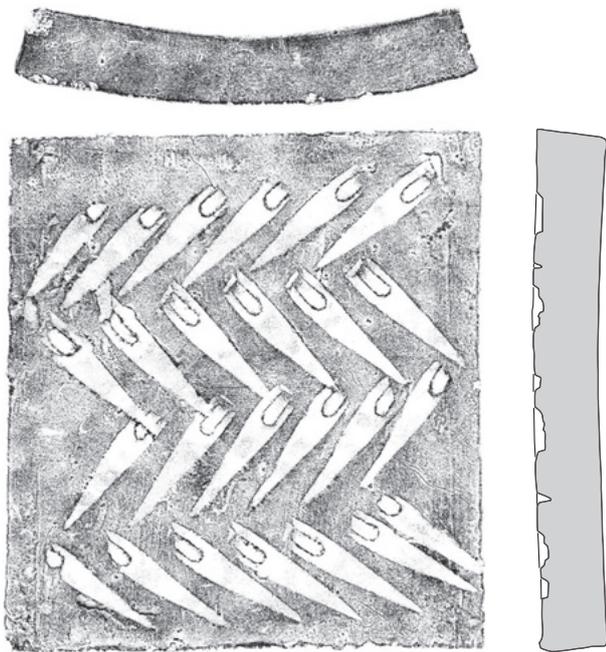


図303 SE11125井戸側磚 1:4

桶の上縁から深さ約1mで井戸底面となる。井戸の内部からは、近世のほか近現代の遺物が出土した。

(国武貞克)

4 出土遺物

土器・土製品 本調査では整理用コンテナ5箱分の土器・土製品が出土した。中・近世から近代の土師器・瓦質土器・陶磁器・土製品を中心として、奈良時代の土師器・須恵器の小片が少量混じる。これらが一定量出土した遺構は、土坑SK11121、井戸SE11125に限られる。ただし、いずれも小片のため図示はしない。

SK11121からは、瓦質摺鉢と土釜を中心とする室町時代の土器がまとまって出土した。ただし、小片ながら奈良時代の土師器(杯C、皿C、甕)・須恵器(杯B、杯B蓋)が含まれる。摺鉢は、いずれも口縁部から胴部にかけて部分的に残存する破片資料である。全体的に緩く内彎し口縁端部を丸く収めるもの(14世紀後半~15世紀中頃)、口縁部が緩く内彎・肥厚し口縁端部に内傾する面を持つもの(15世紀中頃~後半)、やや内彎気味に斜上方に広がる口縁部に顕著に内傾し先端がやや鋭いもの(15世紀末~16世紀前半)、また、内彎する胴部と顕著に外折する受口状口縁を有するもの(16世紀末~17世紀第2四半期)が認められる。土釜は、瓦器である和泉D1型1点を除き、す

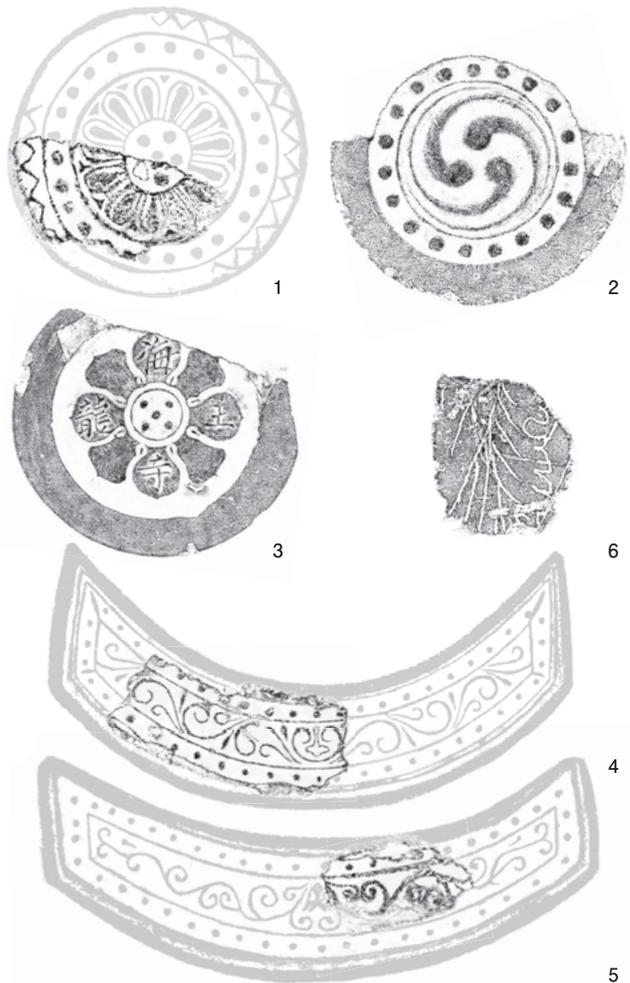


図304 第575次調査出土軒瓦 1:4

べて土師器である。このうちもっとも顕著であるのは大和I2型の土釜であり、ほかに、大和I3型、大和H1・H2型の土釜が認められた。これらの年代は14世紀から16世紀までに収まり、摺鉢の年代と矛盾しない。

井戸SE11125掘方からは、呉須による染付、信楽焼や瓦質土器の摺鉢、土師器皿などが見られ、これらは近世に属するものと考えられる。埋土からは明治時代以降の近代染付磁器や国産陶器などに加えて、人頭・人面を象った土製品や土製人形片も少数出土している。

(山藤正敏)

瓦磚類 本調査区で出土した瓦磚類は表45に示した通りである。ここでは軒瓦を中心に主だったものを報告する(図304)。瓦の大半は中世以降ものが占めるものの古代の瓦も一定数出土した。土坑SK11121から出土した6318B(1)と6714A(5)は天平17年以後の法華寺造営期に補足瓦として用いられたセットに当たる。この土坑

表45 第575次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6138	B	1	6664	F	1	棧瓦	9
巴 (中世)		6	6667	A	1	波状棧瓦?	1
(近世)		5	6681	B	1	ケラバ (近世)	1
(近代)		2	6691	A	2	掛平瓦	1
菊丸 (近世)		1	6714	A	1	丸瓦 (刻印)	2
古代		1	平安		1	平瓦 (刻印)	1
中世		1	鎌倉		3	隅切平瓦	1
近世		6	近世		4	隅軒平瓦 (近世)	1
近代 (菊花文)		1				鬼瓦	1
時代不明		3				面戸瓦	3
						熨斗瓦	28
軒丸瓦計		27	軒平瓦計		14	隅熨斗瓦	1
						伏間瓦	11
						丸棧伏間瓦	2
						目板瓦	8
						輪違い	1
						留蓋	1
						水波文磚	1
						磚 (緑釉)	2
						井戸磚	51
						用途不明道具瓦	9
						土管	4
						礎石	1
			軒棧瓦計		2	その他計	141
			丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩	レンガ
重量	102.556kg	292.934kg	198.045kg	4.739kg	0.632kg		
点数	550	2106	70	9	1		

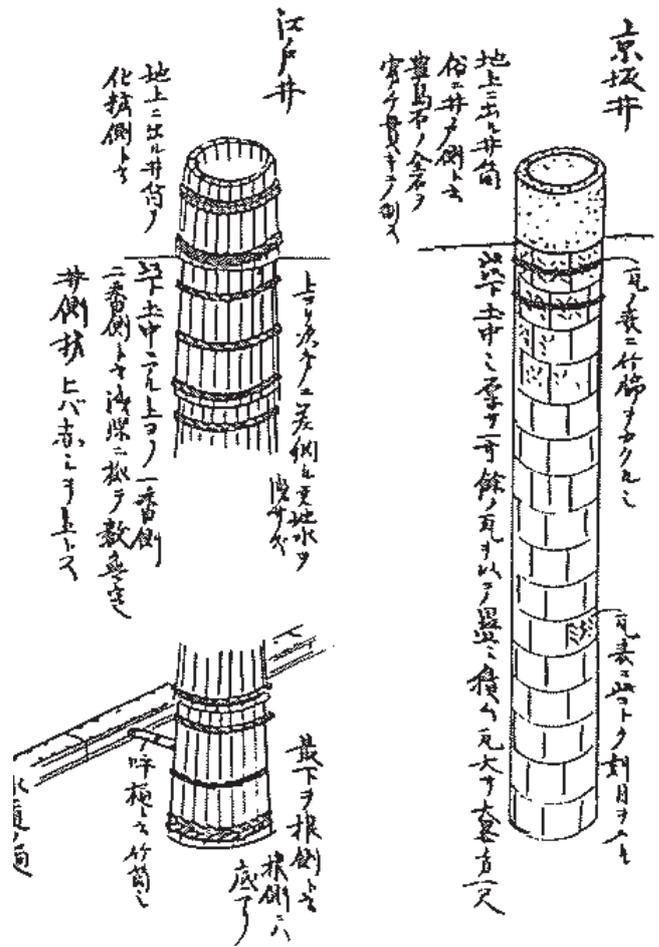


図305 『守貞漫稿』にみえる京阪 (右) と江戸 (左) の井戸

SK11121からは6714A (4) や水波文磚 (6)、緑釉磚も出土した。6714AはIV期の瓦で法華寺創建瓦を焼成した音如ヶ谷瓦窯産。SE11125の掘方や周囲からは中世の巴文軒丸瓦 (2)、SE11125の中からは近世から近代にかけての軒瓦や道具瓦などが多数出土。海龍王寺銘花文軒丸瓦 (3) も出土。近世の所産と考えられる。(岩戸晶子) 木簡 計6点が出土した。削屑は含まれない。すべて井戸SE11125からの出土で、近世または近現代に属する遺物とみられる。うち1点は材が長さ17cm、幅3.5cm、厚さ0.8cmの長方形で、冒頭や下の部分に比較的大振りな文字で「小川」と記す。表札などである可能性が考えられるが、他の部分は判読しがたい。他は微細な断片や用途未詳のものなどで、記載内容や機能を特定できる資料はみられない。(山本祥隆)

5 まとめ

法華寺旧境内において中世と近世の遺構を検出したが、古代の遺構は検出されなかった。

中世は、瓦質土器や土釜を含む大小の土坑群を検出した。規模や形態は異なり、廃棄土坑が繰り返し構築され

たものと考えられる。

近世は、礎石建物1棟と埋甕遺構2基を検出した。礎石建物は調査区外に続き建物の向きや規模は不明である。埋甕遺構SJ11124からは底面に土師器小皿が2点検出されたことから、何らかの埋納行為があった可能性がある。井戸SE11125は瓦形の磚により組まれた特徴的な構造をしている。最下部の約1m分はほぼ同じ径の桶を逆位に据えられていた。この構造の井戸は、『守貞漫稿』(喜多川守貞 嘉永6年)に京阪に特徴的な井戸として紹介され、堺市の堺環濠都市遺跡や京都市の史跡御土居周辺などでは、室町時代から江戸時代初頭までに構築された事例が知られている(図305)¹⁾。井戸内部からは近世に加えて、近現代の遺物が出土したため、廃棄の年代は近現代である。近世に特徴的な井戸の構造を調査することができた点で貴重な成果である。(国武)

註

- 1) 朝倉治彦編『合本自筆影印守貞漫稿』東京堂出版、35頁、1988。